

オンライン短期海外研修の教育的効果：ケーススタディ

ハドリー浩美

新潟大学教育・学生支援機構コモンリテラシーセンター

要旨：新型コロナウイルス感染症拡大により、短期海外研修がオンライン上で提供されるケースが急増している。本稿では、二つの既成のオンライン短期海外研修（10日間）に参加した学生が、その学びや経験をどのように認識したかを明らかにすべく、研修前後に実施したアンケート調査の量的データと修了報告書の質的データとを照らし合わせて分析した。分析結果から、テラーメイドではない既成のオンライン短期海外研修であっても、大学の教育目標に沿った教育的効果が期待でき、その効果は適切な教育的介入によって高まる可能性が示唆された。

キーワード：既成のオンライン短期海外研修、研修前後の自己評価、教育的介入

1. 背景と目的

2013年度教育再生実行会議による日本人留学生倍増の提言を踏まえ、補助金の対象が個人から大学へと移りつつある中で(正楽, 杉野, 武, 2017)、数値目標を達成するために、短期海外研修を正課科目として認定する大学が増加している。しかしながら、近年では量的拡大を急ぐあまり、教育理念に沿った短期海外研修プログラムを派遣先大学と協同で開発する余裕がない大学が増えてきている。筆者が所属する地方国立大学においても、学生にとって留学よりもハードルが低く参加しやすい短期海外研修への参加者が増加しているが、教育の質の保証が十分なされているとは言い難い状況である。

こういった中で、新型コロナウイルス感染症が世界各地で拡大し、これまで派遣先大学が提供していた既製の画一的な短期海外研修プログラムが、Web会議システム上で提供されるようになってきている。Ikeda(2021)は、派遣を伴わない国際交流学習(International Collaborative Learning)を、日本の外国人留学生などとの交流により学ぶ ICL at Homeと、遠隔リソースを使用する ICL at Distance とに分類し、海外派遣を伴う ICL Abroad とは目的が異なる学習として積極的に評価している。Ikeda は ICL at Distance の例として、異なる国の大学教員が共同で授業を設計して実施するCOIL(Collaborative Online International Learning)を挙げているが、本稿が調査対象とするプログラムのような、既成の短期海外英語研修プログラムの「オンライン版」であっても独自の目的や効果を持ちうるものなのか。それとも、「あくまでも渡航ができない状況下での次善の策」(株式会社進研アド, n.d.)に過ぎないのだろうか。

本稿の目的は、海外の大学が現地プログラムの代替として提供する既成のオンライン・プログラムのうち、新潟大学で著者が担当する二つのオンライン短期英語研修を事例として、参加した学生の視点から教育的効果を明らかにすることにある。これにより、教育の質保証という観点から、新潟大学で実施する事前研修・事後研修の改善の重要な手がかりを提供すると同時に、オンライン短期海外研修に関する知見の蓄積に寄与するものとする。

2. 先行研究

2.1. 派遣型の短期海外研修の教育的効果

従来の派遣型短期海外研修のうち、期間が4週間以下の研修への参加前後では、外国語運用能力に一定の向上が認められたとする報告(Tajima, 2020; Kimura, 2009; 木村, 2011; Llanes and Muñoz, 2009)がある一方で、派遣時点の運用能力によっては変化が認められなかった事例(野中, 2005)もあり、いまだ結論には至っていないが、外国語に対する学習意欲の向上が確認されている(小林, 2017; 大岩, 2018; 鈴木, 林, 2014)。

言語面以外の教育的効果としては、異文化接触による自己変化(鈴木, 2016)や、異文化に対する耐性と共感(Black and Duhon, 2006)、異文化対応力(古村ほか, 2020)、自文化の振り返り(渡部, 2009)、グローバル・アウェアネス(Kurt, Olitsky and Geis, 2013)、社会人基礎力(小林, 2013)などの強化が示唆されている。さらに、工藤(2009)や小西(2017)、真野(2020)は、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる包括的な成長プロセスの解明を試みている。

2.2. オンライン短期海外研修の教育的効果

つぎに、4週間以下のオンライン短期海外研修の教育的効果のうち、外国語運用能力にもたらす効果については、瀬尾(2021)が報告を行っている。ブルネイの大学が提供するオンライン研修の前後に実施した英語力測定テストでは、参加者の総合点およびリスニングの得点が有意に上昇し、アンケート調査からも参加者自身はその手応えを感じている様子がうかがえる。

オンライン短期海外研修がもたらす言語面以外の教育的効果については、いくつかの課題も指摘されているものの、一定の効果が示唆されている。上述のブルネイ・オンライン研修では、ブルネイの文化や社会について現地の講師や学生から直接学んだり、オンライン上で交流したりできたことから、参加者は実際にブルネイにいるかのような体験ができていたことがアンケート調査から明らかになったという(瀬尾, 2021)。加えて、派遣型プログラムよりも経済的・心理的ハードルの低いオンライン研修であったからこそ、参加を決意した学生も複数いたと述べられている。Chu and Torii(2021)では、Intercultural Competency Scale(Chao, 2014)を用いて分析した結果、フィリピンでの英語研修に一定の教育的効果があったことが報告されている。清藤、橋本(2021)では、アメリカ、韓国、台湾の言語・文化研修参加者に対し心理分析ツールBEVI(The Beliefs, Events, and Value Inventory)による分析を行った結果、効果が確認された側面(社会文化オープン性、すなわち、文化、経済、教育、環境、ジェンダー・国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策、実践に関して、進歩的・オープンであること)と確認されなかった側面(他者理解や自己認識)とがあったとされている。後者の伸び悩みについては、オンライン上では他者との交流から得られる経験が限られるためではないかと推察されているが、これは、Lewis and Markey(2020)が、アメリカの大学生を対象にVALUEルーブリック分析を行って得た知見から、オンライン上で他者との交流を促進する活動の必要性を提唱したことに通じるものがある。

コロナ禍で急速に増加したオンライン短期海外研修については、現在多数の研究者が検証に取り組んでいるところであるが、本研究は、とりわけ既成のオンライン短期海外研修に関する調査として、その一端を担うものである。具体的には、地方国立大学で著者が担当する二つの既成のオンライン短期海外英語研修において、その主な教育的効果を参加学生はどのように認識したかをリサーチ・クエスチョンとする。

3. 調査方法

3.1. 調査対象プログラムと調査対象者

調査対象としたプログラムは、2021年度夏季に、カナダの大学が提供した10日間の英語研修およびニュージーランドの大学が提供した10日間の英語研修である。カナダのプログラムは、8月18日～8月31日の平日に実施され、リアルタイム英語授業15時間、動画視聴による英語学習10時間であった。その他、他大学や他国の学生と一緒に活動する各種ワークショップやアクティビティが希望者向けに提供された。ニュージーランドのプログラムは8月30日～9月10日の平日に実施され、リアルタイムの英語授業30時間、リアルタイムの文化・慣習に関する授業10時間であった。いずれのプログラムでもプレースメント・テストの成績により習熟度別クラスが編成された。これに新潟大学での事前研修(ディスカッションでの英語表現、異文化コミュニケーション)、事後研修(振り返り)、事前・事後のスピーキングテストを加え、所定の成績を収めた参加者には、正課科目として2単位を付与した。

本調査の対象者は合計26名で、内訳は表1のとおりである。

表1 調査対象者の構成(カナダ11名、ニュージーランド15名)

属性	学部										
	人文	教育	法	経済	理	医	歯	工	農	創生	院
カナダ	1	--	--	1	1	2	1	2	2	--	1
NZ	2	3	--	--	2	2	--	2	4	--	--
属性	学年						性別		海外渡航歴		
	1	2	3	4	5	M1	女	男	有	無	
カナダ	7	1	1	--	1	1	7	4	10	1	
NZ	11	2	2	--	--	--	11	4	7	8	

3.2. データ収集方法

研修参加前後に実施された自己評価アンケート、参加後のリフレクション・ペーパー、研修前に各自で設定した目標とその達成度に関する報告書の三つを分析の対象とした。自己評価アンケートは、独立行政法人日本学生支援機構の「留学前・留学後報告書(派遣学生用)」の23の質問項目を踏襲したものである(独立行政法人日本学生支援機構, n.d.)。これは、新潟大学留学センターが実施している各海外研修プログラムの特徴をあぶり出す目的で、本年度から導入された。各項目の回答形式は、5「強

くそう思う」、4「かなりそう思う」、3「少しそう思う」、2「どちらとも言えない」、1「そう思わない」の5段階評価となっている。リフレクション・ペーパーには、印象に残ったことを日本語で自由に書いてもらった。

なお、研究・調査における個人が識別されない範囲でのデータの利用については、参加者に説明して承諾を得ている。日本語を母語としない参加者1名の回答については、筆者が和訳して引用した。

3.3. 分析の枠組み

本研究では、混合研究法の収斂デザインを採用した(Creswell and Clark, 2017)。まず自己評価アンケートの各項目において、研修前と研修後に有意な差が認められるかを分析し、さらに効果量を求めた(表2)。サンプル数が少なく正規性が仮定できないため、分析にはWilcoxonの符号付順位検定を使用した。つぎに、有意差が認められ、かつ効果量が大であった項目をコードとし、質的データと照らし合わせた(表3)。

4. 分析結果と考察

自己評価アンケート調査の分析結果を表2に示す。23項目のうち、「男女共同」を除くすべてに有意差が認められ、研修前よりも研修後の自己評価が高くなったことが示された。効果量も「男女共同」を除く項目では、大($r \geq .50$)もしくは中($r \geq .30$)であった。

表2 研修前・研修後の自己評価アンケート調査結果

	評価観点	N	研修前	研修後	Z値	r値
1	主体性：自分からやるべき課題を見つけて率先して取り組むことができる	26	3.00 (3.00-4.00)	4.00 (3.00-4.00)	-3.34 **	.46
2	働きかけ方：仲間に働きかけ、問題点を一緒に改善するために行動することができる	26	3.00 (2.75-4.00)	4.00 (3.75-4.00)	-3.57 **	.50
3	実行力：自ら目標を設定し、失敗を恐れず粘り強く行動することができる	26	3.00 (2.75-4.00)	4.00 (4.00-4.00)	-3.72 **	.52
4	課題発見力：自分なりに現状分析して課題点を具体的に提示することができる	26	3.00 (2.00-3.25)	4.00 (3.00-5.00)	-3.69 **	.51
5	計画力：課題に向けた解決プロセスを考え、計画的に実行することができる	26	3.00 (2.75-4.00)	4.00 (3.00-4.00)	-3.05 **	.42
6	創造力：既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい考えで、意見やアイデアを工夫して提案できる	26	3.00 (2.00-3.00)	3.00 (2.75-4.00)	-3.04 **	.42
7	発信力：自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらえるように的確に伝えることができる	26	3.00 (1.75-3.00)	3.00 (3.00-4.00)	-3.62 **	.50
8	傾聴力：相手の話しやすい環境を作り、適切な意見を引き出すことができる	26	3.00 (2.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	-3.87 **	.54
9	柔軟性：自分の意見ややり方に固執せず、相手の意見や立場を尊重して柔軟に対応できる	26	3.00 (2.75-4.00)	4.00 (4.00-4.25)	-3.23 **	.45

オンライン短期海外研修の教育的効果：ケーススタディ

10	状況把握力：	チームで仕事をするとき、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解することができる	26	3.50 (3.00-4.00)	4.00 (4.00-4.25)	-2.83 **	.39
11	規律性：	その場のルールや手続きに従って、自ら行動や発言を適切にすることができる	26	4.00 (3.00-4.00)	4.00 (4.00-5.00)	-2.98 **	.41
12	ストレスコントロール力：	ストレス状況に置かれても、自分の成長機会だとポジティブに捉え、前向きに対処することができる	26	3.00 (1.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	-3.60 **	.50
13	外国人との協働力：	自分の文化背景の異なる場所また仲間とでも、リーダーシップを取ることができる	26	2.00 (1.00-3.00)	3.00 (3.00-4.00)	-3.96 **	.55
14	チャレンジ力：	リスクがあっても、挑戦してみる事が大切だと考え、実行することができる	26	3.00 (2.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	-3.79 **	.53
15	異文化コミュニケーション力：	不十分な外国語力であっても、何とか意味を伝えようと積極的に発信することができる	26	3.00 (2.00-4.00)	4.00 (4.00-5.00)	-4.08 **	.57
16	異文化理解力：	自分とは異なる信仰や文化的背景を持っている人を理解し、受入れることができる	26	4.00 (3.00-5.00)	5.00 (4.00-5.00)	-3.12 **	.43
17	外国人との交流：	国内・海外を含めて、外国人との交流がある	26	3.00 (1.00-4.00)	3.00 (2.75-4.00)	-2.16 *	.30
18	勉学意欲(専門)：	専門分野の勉強へのモチベーションがある	26	4.00 (3.00-5.00)	4.00 (3.00-5.00)	-2.84 **	.39
19	勉学意欲(語学)：	語学の勉強へのモチベーションがある	26	4.00 (3.00-5.00)	5.00 (4.00-5.00)	-3.03 **	.42
20	留学先の知識：	交流先・留学先の社会・習慣・文化に関する知識がある	26	2.00 (1.00-3.00)	4.00 (3.00-4.00)	-3.37 **	.47
21	政治・社会・国際関係の知識・関心：	政治・社会問題・国際関係について、知識・関心がある	26	3.00 (3.00-4.00)	4.00 (3.00-4.25)	-3.35 **	.47
22	男女共同：	社会での男女共同参画(男女平等)の重要性を認識している	26	4.00 (3.00-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	-1.25	.17
23	将来ビジョン：	将来の方向性・進路について、明確な考えを持っている	26	3.00 (2.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	-2.84 **	.39

注) 中央値(四分位範囲)、* p<.05、** p<.01

つぎに、自己評価アンケートで有意差があり、かつ効果量が大であった項目に的を絞り、オンライン研修終了後のリフレクション・ペーパーおよび目標達成度に関する報告書から代表的な記述を関連付けた(表3)。

表3 有意差あり・効果量大の自己評価アンケート項目と質的データとの統合

働きかけ方	[小グループでのスピーキング練習中に] やるべき内容が終わって沈黙になってしまったときに、自分から話題を提供した。その結果、話が広がり、会話に機会を増やすことができた。(O4)
	少人数での話し合いの時に会話を続けることを意識した。話が途切れて沈黙となってしまう場面もあったが、その時には自分から話し出すことを意識した。(O10)
	会話が停滞した際には主題に関連して新しい質問を出して会話をつなげることを意識して以降の討議に生かすことができました。(O3)

実行力

私は研修前に、自分から積極的に、かつ自信を持って発言することと使えそうな英文のフレーズを沢山取得することを目標にした。研修が始まって間もない頃と今を比較すると、言い間違えをしないかといった不安を感じることもなく、積極的に自分から発言することが多くなった。またクラスメイトとのディスカッションを通して、I think that .., Do you have any ideas?, I don't know..., What do you think about question1? などの議論をする際に使えそうなフレーズを多く駆使することが出来た。(O9)

相手の態度や行動を、自分の見方で決めつけず、いったん判断を保留する力 [をつけることを目標とした]。意見が対立しても相手の意見をしっかり聞いて話し合っただけで議論を進めることができた。(O13)

目標は(中略)英語で言えることではなく言いたいことを言うということでした。ディスカッションにおいて言いたいことを言う努力が出来たと思います。しかし、やはり英語力が足りず英語の運用に思考が持っていかれてテーマについて日本語の時のように深く思考できていなかったと思います。(O8)

目標は、「3日目からブレイクアウトルームで自分から話を切り出す」にしました。この目標の達成度としては、3日目からというのは達成できませんでしたが、5日目くらいからブレイクアウトルームで自分から話し出せるようになりました。本プログラムで少し積極性を身に着けることができました。今後、大学の授業でも今回の経験を活かしたいです。また、何事にも目標が大切であると感じました。授業や部活動でも目標を設定し、1回1回の授業や部活動を大切にして、自分の大きな成長に繋がりたいです。(O5)

課題発見力

これまで読む書く聞くに関してはある程度出来ていたし、実際普通の大学での授業や今回のプログラムでのライブ授業の中でも先生や他の学生が話している内容がある程度正確に理解できた。しかし話すことに関しては日本語で話したいことを思い浮かべ、それを日本語から英語に変換する際に適切な単語や表現方法がパッと浮かばないということが多くとても苦勞した。今後は読む書く聞くのときだけでなく「話す」場面でも使える単語や表現を増やしていきたいと感じた。また増やした語彙を瞬時に取り出して使えるようにしていきたい。(C8)

文化的に寛容になる必要があると思いました。なぜなら、ある国にとっての普通が、私たちの普通でないことがあるからです。感情を害する前に恐れずに話し合うことが大切だと思います。(C11)

自分の意見を持つことの大切さを強く感じた。英語を学ぶ授業ではありながらも、様々な分野の資料を読んだり聞いたりした後に必ず自分ならどうか、自分はどう思うかについて話し合える時間が設けられていた。大学受験に向けた授業が主となっていた高校時代から、与えられた資料文献に対して反論する考えや自分の立場を明確にするということを忘れていたと感じた。このことはおそらく他の日本人学生も似ていたと思う。(中略)クラスメイトの中で私が刺激を受けたのは、台湾からの留学生だった。彼は16歳であり私や他の学生よりも学年が低いが、私よりもはるかに自国についての理解があるし、自国に対してそれ以外のことに対しても自分の意見を持っていると感じた。(中略)私は自身の自国や海外についての情報量の乏しさに危機感を覚えたし、自分の意見を持っていないこともそれを裏付ける情報がないことや情報をただ受け入れるだけで思考していないことに起因していると考えた。

しかしながら、最初は苦勞していた私や他の学生も何度もその様な機会を重ねて積極的に自分の意見を言い合えるようになっていったと感じた。このことから、足りないのは能力ではなく、自分がいつもいる居心地の良いコミュニティから一歩出て客観的に自分を見つめ、現実気付くことと実践練習を積むことだと思う。(中略)私は留学以来、新聞を読みはじめました。(O8)

この研修中は常に英語を使い続けたのだが、これを通して私が強く感じたのは、英語は実際に使ってこそ上達するということだ。英語の会話を重ねていくうちに、自分が一回会話で使ったことがある構文や単語はすらすら出てくるのに対し、自分が理解しているつもりだったものは話すときに出てくることはおろか、聞いても理解に時間を要してしまうことが多々あった。(O6)

この研修への参加は、「壁打ち」状態から脱却するにおいて、非常に大きな役割を果たしたのではないだろうか。「壁打ち」的学習の反対は、双方向的・相互的学習であると私は考えている。つまり、人とかかわりあいではかできない学習であり、また、バックグラウンドの異なる人と関わるほどその学習の深度は高まると考えている。(中略)本研修では、全くそうした背景の異なる人々と学習を行うことができた。(中略)会話力という語学における最も重要な要素の1つを伸ばすだけでなく、分野に関わらない学習能力の向上が遂げられたように思われる。(O2)

オンライン短期海外研修の教育的効果：ケーススタディ

初日は自己紹介も思うようにできず、自分のことでさえ話せないということがとても悔しかった。初日の反省を踏まえて、2日目からは間違いや失敗を気にせず発言することを意識した。このことにより、分からないところは積極的に質問できるようになり、グループディスカッションでも自分の意見を共有することができた。間違ったりうまく伝えられなかったりした事もあったが、そこから改善点が見つかったので、間違いや失敗を気にせず積極的にはなすことはとても大切だと実感した。(C7)

発信力

最初は何を話せば良いのか分からず長く話すことが難しく感じていたのですが、General、Detail、Feeling、Conclusionの4つを意識することを学んだからは、日本語とは異なった会話の組み立て方ができるようになり、ディスカッションの中で自分の考えを詳しく伝えられるようになりました。(中略)私は将来研究職に就きたいと考えており、英語で自分の考えを適切に表現する力を向上させることができたのはとても嬉しかったです。(O12)

10分程度のプレゼンテーションをした際には、話すことを文章に起こさず、話す内容だけ決めてその場で話してみようと思ってやってみた結果、完璧に話せたわけではないですがクラスメートや先生に内容を伝える事ができ、褒めていただけて、かなり自信に繋がりました。(O15)

課題を通して調べていくうちに、日本の文化の知らないところもたくさん知ることができました。例えば、日本では生の魚を食べることはよくあることですが、なぜそうなったのかについては今まで考えたことはあまりありませんでした。日本が海に囲まれて海産物に恵まれているだけでなく、地形的に運搬に時間がかかりづらいこと、また醤油やわさびで保存性を高まったことなどが関係しているそうです。それらを英語で説明しなくてはならず必然的に日本に対する理解を深めなければいけないので、貴重な経験でした。(C4)

最初は英語を話さなければという方に意識が行ってしまい、段階を踏んで話すことができなかった。しかし、自分のスピーキングを改善していくことで、最後は接続語を用いて相手に伝わる表現で話すことができた。(O4)

傾聴力

まずは自分の意見を出したりその場の空気を軽くしようと努力していました。話しかけづらいと感じていそうだったり伝えたいことを英語にできなくて困っているクラスメートを助ける機会も多く、英語の壁を越えてより良いコミュニケーションのために尽くすことができるまでに余裕が持てるようになったことが成長だと思いました。(C5)

ストレスコントロール力

研修中に「ネガティブ・マインド」という本を読んでいました。失敗した時の対処法を研修で実践してみたところとても効果的でした。研修中は、失敗の連続でしたが、自分を責めることなく、安定した気持ちで最後まで継続できたことが、進歩だと思います。(C1)

外国人との協働力 (該当なし)

チャレンジ力

初回の授業では、現地の先生に英語を話すという点で、私の英語が通じるのかといった緊張で自分から積極的に発言することが出来なかった。しかしこの初回の授業終了後、発言が出来なかったことに後悔し、明日は今日よりもさらに発言しようと思った。そしてその後の授業で、クラスメートと教科書の正誤問題や質問、1トピックに対する議論などを通して、英語を話す機会が今までよりも格段に増えたことで、言い間違えないかという漠然とした不安が徐々に減っていき、今まで以上に自分から話したいと思えるようになった。(O9)

1番の大きな変化は、挑戦を恐れない姿勢が身についた事だと思います。このプログラムを通じて、間違いをしてしまうことや上手く出来ない事が何度もありましたが、その度に先生やクラスメートが指摘してくれたり、助けてくれ、間違える事で学べる事が多くある事や、挑戦してみないと、せっかくの成長の機会を逃してしまう事にも気づくことができ、積極的に挑戦する事が出来るようになりました。さらに、挑戦した結果やり遂げられた時には自信を得る事も出来ました。(O15)

[SNSで]情報発信をする際にふと思ったことがある。日本だけでなく海外の人々にも情報発信できないだろうかという事だ。[本研修で得た]英語を勉強したいというモチベーションと外国人とメールでやり取りした経験が海外への情報発信に活かせるのではないかと考えている。コロナ禍でオンライン化が進み、コンテンツ販売もオンライン化が主流になる中、自分のコンテンツを日本だけでなく海外へも発信できるようになれば、素晴らしいことだと思う。これからの情報発信に今回の研修は、必ず生きるはずだ。(C1)

異文化コミュニケーション力

今回の英語研修を通して積極的に会話をする事の大切さを学びました。もちろん文法や英単語を深く理解することでより自身の英語の能力や技術を向上させることはできますが、そのことよりも会話をつなげるということが私にとって今必要なことなのではないかと改めて思いました。(中略)正しくなくても発言してみる、そして伝わらなかった場合には持てる限りの知識を使って伝えるという意識が必要であることがわかりました。(O3)

今までは、テスト対策の英語の勉強しかしておらず、英語を使ったコミュニケーションをとる機会はほとんどなかった。そのため、この英語研修が始まった初日は、正しい文法、単語で話すことばかり意識が向いてしまい、話すことを怖がり、自分の考えを相手に伝えることができなかった。しかし、授業でグループワークを行っていくうちに、他の学生も完璧な英語を話しているわけではなく、自分の言いたいことを伝えようと努力している姿勢が感じられた。私はその姿を見て、失敗を恐れない姿勢が大切だと言うことに気がついた。それから私は、英文法の細かいミスは気にせず、なるべく簡単な単語を使って自分の考えを伝えることができた。英語を話す上で、失敗を恐れないことの大切さを実感した。(O11)

私はまだ英語を流ちょうに話すことはできませんが、それでも伝えようと努力する姿勢で何とか伝わるのだということも感じました。(C2)

日本以外の異なる国の人がたくさんいる状況下であったため、日本語は一切使うことのできない状況でした。そのため、なんとか自分の意見や思いを伝えようとトライすることができました。伝えることの大変さは感じましたが、全く違う国、文化の中で育っても「英語」を通して気持ちを伝え合え、笑い合えることの喜びを感じました。(C10)

今回の研修では台湾や中国出身の方と会話する機会もあった。私の英会話の力はまだまだだけれど、英語を使うことで他の国の方とも話すことが出来るのだと改めて実感したことでやる気が湧いてきた。話したことが通じる喜びを感じ、もっと頑張りたいと思った。(O10)

以下、項目別に考察する。

働きかけ方： グループでの会話が停滞した(=問題点)際に、率先して話題を提供し(=仲間への働きかけ)、会話を発展させた(=改善)というほかには、該当する記述は見当たらなかった。

実行力： 参加者全員が何らかの記述を行っていた。これは、事前に「達成可能な小さな目標」を各自に設定させ、研修後に報告させたためである。海外研修においては、意図的な教育的介入の重要性が明らかになっており(Jackson and Oguro, 2017; 池田, 2014; カッティング, 合田, 鈴木, 2020; Kobayakawa, 2019)、本オンライン研修においても、事前に目標に対する意識化を図ることで、失敗しても粘り強く達成を目指して行動することを促進できたようである。

課題発見力： 異なる文化的背景を持つ教員やクラスメートと共に学習したことで、自分の英語力や英語学習に関する課題を発見したという記述が多かった。さらに、異文化に寛容になることの必要性や自分の意見を持つことの重要性等に気づいた参加者もいた。

発信力： 事前にトピックに関して調べたり、話の組み立てを考えたりして、相手に適切に伝わるよう努力した様子が見える。

傾聴力： 該当する記述があったのはひとりだけであったが、自己開示等により、相手が話しやすい雰囲気を作り出すことに注力していた。

ストレスコントロール力： 失敗したときに書籍から学んだ対処法を実践し、その効果を実感したという記述があった。ほかには、当初は英語を話すことに恐怖を感じていたという参加者が数名いたが、どのように対処したのかという具体的な記述は見

られなかった。

外国人との協働力： 異文化および異文化コミュニケーションについて学べた、文化的背景の異なるクラスメートと一緒に学べて楽しかった等の記述は見られたものの、協働作業でリーダーシップをとったという例はなかった。

チャレンジ力： 間違いを恐れずに英語で発言することで成長を実感したという記述が散見された。研修での経験を活かして、SNSを使って海外への情報発信に挑戦したいという参加者もいた。

異文化コミュニケーション力： 本調査における定義(不十分な外国語力であっても、何とか意味を伝えようと積極的に発信することができる)に沿う記述としては、英語の語彙や文法の知識の重要性は認めるものの、英語学習者として間違いを恐れずに話すことで、母語の異なる人々と意思疎通ができた喜びを綴ったものが多かった。まさに、Cummins(1979)の言うBasic Interpersonal Communication Skills(基礎的対人伝達スキル)、すなわち他者とコミュニケーションをとるために必要な言語スキルが、実践を通して養成されたものと思われる。

以上9項目のうち「傾聴力」および「ストレスコントロール力」に関しては、それを具体的に説明する十分な記述が見つからず、「外国人との協働力」では例となる記述がひとつもなかった。これらについては、今後インタビュー調査を行って明らかにしたい。

本調査項目の「実行力」で示唆されたように、既成のオンライン研修であっても適切な教育的介入を行うことで、新潟大学が教育目標のひとつに掲げる「社会の諸問題に関心を持ち、自律的な学びと豊かなコミュニケーション能力に支えられた他者との協働による課題解決を通して、地域社会や国際社会に貢献しようとする態度を備えている」人材の育成(新潟大学, n.d.)に貢献できるのではないだろうか。Kelly(1963)が言うように、ある出来事を目撃したからといって、経験として内在化されるとは限らない。必要なのは気づきを促す仕組みであろう。パソコン上ではあっても日常とは異なる場に身を置き(これは本国での国際共修科目や外国語母語話者教員が担当する外国語科目の履修からは得づらい体験であろう)、これまでの知識を再構築しながら、主体的・能動的な学習に発展させていく——こういった機会を従来の派遣型よりも多くの学生に提供できるとなれば、既成のオンライン短期海外研修であっても、コロナ禍における次善の策で終わらずに、独自の目的や効果を持ちうるものと考えられる。

5. 本調査の限界

本調査の限界としては、大西(2020)が指摘するように、参加者の主観に基づく分析であること、対照群の設定ができなかったことが挙げられる。現在、日本の大学では、多少なりとも客観的に海外研修の成果を検証しようと、BEVIの日本語版であるBEVI-j(西谷, 2019)の導入が進められているが、その恩恵にあずかるまでは、研究者各々が可能な手法で継続的に調査研究を積み上げていくことで、ある程度は教育的効果の可視化が期待できるのではないだろうか。

6. 今後の展望

コロナ禍でICTの活用が急速に進んだことで、留学の再定義が求められている状況にあって(Odgen, 2021; Cummings, 2021)、より多くの学生の参加が見込まれるオンライン短期海外研修は、今後もひとつのオプションとして継続されるものと推測される(新見, 星野, 太田, 2021)。オンライン型では従来の派遣型とは違い、「フレンドリーな現地人との出会い」(真野, 2020) やホームステイ先でのディナータイム(出口, 2021)など、実際に海外で日常生活を送ることによってもたらされる気づきの機会を提供することはできない。しかしながら、本研究でも示唆されたように、適切な教育的介入によって気づきを促し、特定の能力やスキルを養成することは可能であろう。とりわけ、テラーメイドではない既成のオンライン短期海外研修を提供する場合には、具体的にどういった能力やスキルを養成したいのかを明確にし、それに必要な教育的介入を本国のキャンパスで事前や事後に行うと同時に、カリキュラム上の位置づけを明確にし、評価・点検のシステム構築に取り組むことが急務である。今後は、効果的かつ実行可能な介入方法について調査を進めていきたい。

謝辞

本研究はJSPS科研費19K02882の助成を受けたものです。本稿で使用した自己評価データは、新潟大学留学交流推進課よりご提供いただきました。ここに記して感謝いたします。本稿に誤りがあれば責任は著者にあります。

参考文献

- 池田伸子.(2014). 効果的な「海外留学研修」プログラムの開発に関する一考察. *ことば・文化・コミュニケーション：異文化コミュニケーション学部紀要*, 6, 17-30.
- 大岩昌子.(2008). 外国語学習者の習熟度を予測する要因：動機づけと海外語学研修の有効性.*名古屋外国語大学外国語学部紀要*, (35), 227-236.
- 大西好宣.(2020). *海外留学支援論—グローバル人材育成のために—*. 東進堂.
- カッティング美紀, 合田美子, 鈴木克明.(2020). 留学の事前研修の指導と効果：学びの「転移」の観点から.*大学教育学会誌*, 42(1), 95-104.
- 株式会社進研アド. (n.d). 大学改革を知る：次善の策としてのオンライン留学でわかった可能性と限界—武蔵野大学. *Between*情報サイト. 2021年9月9日アクセス. <http://between.shinken-ad.co.jp/univ/2021/07/musashino.html>
- 木村啓子.(2011). 大学生の海外短期研修の効果への一考察：リスニングとライティングに焦点を当てて. *尚美学園大学総合政策研究紀要*, 21, 17-30.
- 清藤隆春, 橋本智.(2021). BEVIを用いたオンライン留学の効果測定：コロナ禍でのグローバル人材育成の試み. *高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報*, (2020), 12-21.
- 工藤和宏.(2009). 日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果：グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく一考察. *スピーチ・コミュニケーション教育*, 22, 117-139.
- 小西由樹子.(2017). 短期留学を通じた自己効力感の向上：参加大学生へのインタ

- ビューを用いた質的調査. *早稲田国際経営研究*, (48), 17-26.
- 小林千穂. (2017). 短期留学の外国語学習モチベーションへの効果. *天理大学学報*, 68(2), 1-19.
- 小林文生. (2013). 短期海外研修による教育的効果の再検討. *一橋大学 人文・自然研究*, 7, 162-185.
- 正楽藍, 杉野竜美, 武寛子. (2017). 大学の国際化における海外留学支援制度：留学促進に向けた教育体制の構築に向けて. *大学教育研究*, (25), 103-119.
- 新見有紀子, 星野晶成, 太田浩. (2021). ポストコロナに向けた国際教育交流－情報通信技術 (ICT) を活用した新たな教育実践より－. *日本学生試験機構ウェブマガジン留学交流*2021年3月号, 120, 26-41.
- 鈴木栄. (2016). 試行的ナラティブ分析：学生は、海外研修で何を得たか. *湘南工科大学紀要*, 50(1), 73-83.
- 鈴木理恵, 林千賀. (2014). 海外語学短期留学の効果 学生の言語的・情意的側面に見られる変化. *関東甲信越英語教育学会誌*, 28, 83-96.
- 瀬尾匡輝. (2021). オンラインによる海外留学の可能性－コロナ禍におけるブルネイでのオンライン短期海外研修の実践から－. *The Journal of Worldwide Education*, 14(1), 4-18.
- 出口朋美. (2021年10月23日). 日本人留学生とカナダ人ホストファミリーの関係性のダイナミズム－ディナータイムトークを通じて－ [研究発表]多文化関係学会第20回年次大会(オンライン). <https://sites.google.com/view/tabunka-annual/schedule>
- 独立行政法人日本学生支援機構. (n.d.). 留学前・留学後報告書(派遣学生用)(様式 H-1)[エクセル・ファイル]. 独立行政法人日本学生支援機構ホームページ. 2021年11月22日アクセス. https://www.jasso.go.jp/ryugaku/scholarship_a/haken/2021.html
- 新潟大学. (n.d.). 三つのポリシー. 新潟大学ホームページ. 2021年11月2日アクセス. <https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/policies/>
- 西谷元. (2019年10月4日). BEVI-jを用いた留学・学習効果の測定－留学プログラムの質保証・PDCA－. [事例報告]広島大学 海外留学の客観的効果測定国際シンポジウム.
- 野中辰也. (2005). 海外語学研修の効果測定. *新潟青陵大学短期大学部研究報告*, 35(35), 7-12.
- 古村由美子, 工藤俊郎, 青柳達也, 小野博, 佐々木有紀, 新田よしみ. (2020). 異文化対応力測定尺度の試験的運用による短期語学留学の効果検証(長崎大学における試み). *グローバル人材育成教育研究*, 8(1), 24-35.
- 真野毅. (2020). 全員参加の短期海外研修の教育的効果～修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を活用して～. *グローバルマネジメント*, 3, 45-63.
- 渡部留美. (2009). 短期海外研修プログラムにおける参加者の体験と意識変容：参加者に対するPAC分析の結果より. *多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集*, 13, 15-30.
- Black, H. T. and Duhon, D. L. (2006). Assessing the impact of business study abroad

- programs on cultural awareness and personal development. *Journal of Education for Business*, 81 (3), 140-144.
- Chao, T. (2014). The Development and Application of an Intercultural Competence Scale for University EFL Learners. *英語教學*, 38(4), 79-124.
- Chu, C. and Torii, Y. (2021). Communicating Across Cultures Online: Introducing and Comparing the Implementation of Three Virtual Study Abroad Programs. *The JACET International Convention Proceedings: The JACET 60th Commemorative International Convention (Online, 2021)*, 57-58.
- Creswell, J. W. and Clark, V. L. P. (2017). *Designing and Conducting Mixed Methods Research* (3rd ed.). Sage publications.
- Cummings, L. (2021). Internationalizing professional writing programs through online study abroad and open networks. *Computers and Composition*, 60.
- Cummins, J. (1979). Cognitive/academic language proficiency, linguistic interdependence, the optimal age question and some other matters. *Working Papers on Bilingualism*, 19, 197-205.
- Ikeda, K. (2021, September 4). Language Learning Focused COIL (Collaborative Online International Learning) as a New Gateway for Inclusive International Education. [Plenary lecture]. The Japan Association for Language Teaching (JALT) Study Abroad SIG Conference 2021 (Online).
<https://jaltstudyabroad.wixsite.com/conference2021/projects-2>
- Jackson, J. and Oguro, S. (Eds.). (2017). *Intercultural interventions in study abroad*. Routledge.
- Kelly, G. (1963). *A Theory of Personality : The Psychology of Personal Constructs*. New York : Norton.
- Kimura, K. (2009). The influences of studying abroad on language proficiency and the use of language learning strategies: In the case of a three-week English program. *The Bulletin of the Kanto-koshin-etsu English Language Education Society*, 23, 47-58.
- Kobayakawa, Y. (2019). Toyo University's Top Global Project: Student results and implications. In J. Williamson (Ed.). *Proceedings of the Third JALT Business Communications SIG Conference*, 41-52.
- Kurt, M., Olitsky, N. and Geis, P. (2013). Assessing global awareness over short-term study abroad sequence: A factor analysis. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 23(1), 22-41.
- Lewis, M. M. and Markey, M. K. (2021). From Study-Abroad to Study-at-Home: Teaching Cross-Cultural Design Thinking During COVID-19. *Biomedical Engineering Education*, 1(1), 121-125.
- Llanes, À. and Muñoz, C. (2009). A short stay abroad: Does it make a difference? *System*, 37(3), 353-365.
- Odgen, A. (2021). Do we need a new definition of education abroad post-COVID?

University World News: The Global Window on Higher Education. Retrieved on November 8, 2021 from

<https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20210119095105638>

Tajima C. (2020). Language and Cultural Learning in a Short-Term Study Abroad: An Investigation of Japanese Sojourners in Canada. In Goossens R. and Murata A. (Eds). *Advances in Social and Occupational Ergonomics*. AHFE 2019. *Advances in Intelligent Systems and Computing*, 970. Springer, Cham.